

青年期における人格形成と 精神的健康に関する研究（Ⅰ）

—— 研究方法に関する文献展望 ——

井 上 知 子 三 川 俊 樹 芳 田 茂 樹^{*}

A Study of Personality Formation and Mental Health in Adolescence (Ⅰ): Overview of the Methodology of the Research.

Tomoko INOUE, Toshiki MIKAWA & Shigeki YOSHIDA

1. 青年期の定義

青年期は、人間の誕生から死にいたるまでの連続した生の営みの中の一つの時期としてとらえることができる。青年期は児童期と成人期との間の時期であるが、発達心理学の分野で特に関心をもたれるようになったのは、20世紀初頭からであり、特に1950年以降、大きくクローズアップされるようになった。

青年期は人生の中でいったいどのような意味をもつ時期なのであろうか。Hall, S.以来、多くの研究者が青年期について、諸々の立場から論じてきた。それらの知見を概観すると、青年期という時期が人間の生涯の中で他の時期と顕著に異なる発達の様相を示し、かなり独自の特徴をもつものであることがわかる。しかし、青年期を一つに統合して定義づけることは困難であり、大別すると、青年期という発達時期をとらえようとするもの、および青年期に生じる発達の特徴をとらえようとするものの二つのアプローチから、まとめることができる。

（1）発達の一時期としての青年期

青年期が時期としてどれくらいの期間続くのかは、時代により、また社会、文化により様々であり、一概にはいえない。特にその時期の存在は児童観に依るのであり、中世のように子どもを単におとなのミニチュアとみなした時代には青年期はなかったと言っても過言ではない。それ故、青年期が明確に言及されだしたのは近世以降のことである。

* 本学大学院文学研究科修士（昭和62年度）
現在、大手前女子短期大学講師

1762年、ルソーはその著「エミール」の中で、一人の人間は5つの時期を通して成人になると説き、それぞれの段階の精神発達を述べた中で青年期を描き出した。5段階とは、① 幼児期（誕生からほぼ3歳まで）、② 少年期（4・5歳から12・3歳まで）、③ 思春期以前（12・3歳から14・5歳まで）、④ 青年期（15歳から21・2歳まで）、⑤ 青年期の終結（22・3歳から24・5歳まで）であり、このルソーの青年期は現代に比べて遅くはじまり、早く終り、きわめて短期間であった。

青年期を時期としてみると、上述のように、児童期から成人期への移行の時、すなわち過渡期としてとらえることができる。青年期を過渡期としてとらえた上で、その特徴を顕わにした代表的な学者は、Lewin, K. (1956) であった。

Lewinによれば、青年期とは所属集団の変更を意味し、時間的展望についても深刻な変化が生ずる時期であり、青年のおかれた立場は児童と成人という比較的分離、安定した集団の狭間という中途半端な状態におかれ、「境界人」の地位に似ていると考えられた。また「境界人」の行動として特徴的なのは、情緒不安定で神経過敏なことであるが、青年期にその特徴がある程度認められると考えられている。

現代の青年期は、児童から成人への移行の時期で非常に不安定、不確実であると同時に、始期が早まることと終期が遅延するという二重の意味で拡大現象がみられる。すなわち、始期の指標の一つと考えられる生物学的ならびに生理学的な成長、成熟においては発達加速的な前傾現象が認められることは沢田（1982）の報告にもあるように明白な事実である。この生理・生物学的な成長の前傾化には、心理学的な発達も当然随伴することが考えられ、それらの事実から青年期の始期が徐々に前傾していると言える。他方、近年の文化、社会の発展による産業の機械化、コンピューター制御によるオートメーション化による大躍進は、人間の手工技術の必要性を減少し、人間労働の軽減化をひきおこすと同時に機械操作のための高程度の知識・技能の必要性を増大した。また日本経済の高度成長とも相俟って青年の高学歴化をひきおこすことになり、終期の遅延を生じているといえよう。

青年期の遅延、拡大は、個々の青年にとって必ずしも好都合とばかりはいえず、後述するErikson, E. H. の唱えた自我同一性の拡散の一樣相である心理・社会的モラトリアムといった諸々の心理的問題、特に精神的な健康と関連する問題が新たに生じることとなったのである。

（２） 青年期の心理的発達特徴

青年期は移行の時期であるが、その間に生じる発達の変容は、人生の他のすべての時期と比べて極めて特徴的であり、また非常に急激で大きいものであり、古来多くの研究者達がいろいろの面から列挙している。

青年期の発達現象を形式の面からみて、西平（1983）は次の4特性にまとめた。

1. 変化の速度が急激であり、新しい未知の体験として受けとる（未構造化）。
2. 各機能間の成熟や発達が不均等で落差が生ずる（発達の不均等性）。
3. 不安や危険に対する両親や成人の保護がなく、社会的圧力や良心の批判を直接自我の問題として受ける（無被護性）。
4. すべての矛盾が明確に意識化され、評価批判の対象として受けとられる（自覚性）。

児童心理学では、すでに精神発達の基本的な原理が提出されており、これらのものは青年についても妥当するといえる。

青年期の発達的特徴について具体的にのべた代表的な学者としては、まず Spranger, E. (1926) をあげることができよう。Spranger は了解心理学的な立場から青年期の心理的特徴として、「児童期の現実主義的態度による生活状況への適応という安定した状態に比べて、青年期は突然、深刻な動揺が生じ、心の構造の変化がもたらされる、その意味で第二の誕生と呼ぶことができる」とし、次の3点に注目している。すなわち、① 自我の発見、② 生活設計が次第に成立すること、③ 個々の生活領域に進る入ること、である。

Spranger は青年期をその生活の場と人格構造の面からとらえたものといえるが、青年期の特徴は、その他哲学的・人生論的立場、生物学的立場、社会学的立場などどのような立場からとらえるかにより、描き出されるものは異なってくるものといえる。

津留（1970）の提示した次の4特徴は現代の日本青年をより折衷的でしかも一般的にとらえようとしたものといえる。すなわち、

1. 性的成熟の心理的影響
2. 自我の覚醒
3. 新しい価値の世界
4. 成人社会への適応過程

である。

また西平（1979）は青年期を「ヒトという種にとって内的必然性にもとづく発達の1時期である」と規定し、青年性、世代性、個別性の三つの観点でとらえた。さらに「青年性、世代性、個別性と一応、一つ一つ切り離してとらえるが、最終的には統合されるべき性質のものであり、この統合の過程で、主体的な側面をアイデンティティ、客観的な側面を青年の全生活空間としたい」と表明している。

青年性とは、青年期に共通の発達心理的特徴であり、青年らしさという意味である。世代性とは、社会、文化、歴史により異なる現象形態を示す青年期の心理的特質であり、個別性とは、青年性と世代性との交錯の中での個人の所与性、立体的な人生への位置づけである。

このような考えに基づいて、西平は青年の独特の特質を次の4項目に総括した。

1. 身体の急激な成熟によって、社会的役割や自己概念が変容し、反抗や自己否定や社会批判

などの否定性が増大する。

2. 心理的離乳や社会性の成熟によって、社会的地位が変動し、生活空間が変貌する。
3. 自我感情が昂揚することによって、内的矛盾が激化し、内向化の傾向を強め、自我の再構成がおこなわれる。
4. 時間的展望が分化し拡大することによって、生活全体の統合や価値の統一という「生の有機的全体化」が促進される。

上述の如く、青年期の特徴は次々と列挙しうるが、青年期が性的成熟を中心にして、生物学的、生理的に成人になっていく時期（第2次性徴）であるということは基本的な事実である。しかし、人間は生物的に成熟するだけでなく、社会的、人格的にも成熟がもためられることも重要な事実であるといえる。

人生には各発達段階で、達成されなければならない生物学的・社会文化的な課題が存在するのである。

（3） Erikson, E. H. のエゴ・アイデンティティの理論

Erikson は発達の漸成理論の中で、表1に示したように、人間の一生をライフサイクルの中で展望し、8段階に分けて、それぞれの段階において達成される心理・社会的危機所産、重要な対人関係の範囲、人格的な活力（徳）、その他について示した。

発達の漸成（epi-genesis）とは、遺伝的素因が環境との相互作用の中で発現し、生成して人格として形成される連続的なプロセスのことである。このプロセスは同質な連続ではなく段階的であり、一つの機能から次の機能、構造の発達への移行の時に危機（crisis）が生じる。危機とは今まで適応していた内的、外的環境の変動によりもたらされた葛藤的な事態である。この葛藤を克服することにより、各段階に特有の人格的活力（virtue）、つまり「人間を生かし、活動を意味づけ、生き生きとさせる内的な力」が生まれるものであると述べている。

各段階には、身体的成熟と社会的期待や役割など社会化の発達から、解決、達成されるべき独自の発達課題、つまり心理・社会的危機所産が与えられている。とりわけ第Ⅴ段階の青年期は、エゴ・アイデンティティ形成あるいは確立の時期であり、自己の所属する社会集団の中で自分というものが位置づけられることにより、自我の連続性と斉一性、帰属性が形成され維持されるようになるといわれる。表2は、青年以前および以後にアイデンティティがどのようにめばえ、あるいは形成されるかを示したものである。

第Ⅴ段階の水平にはアイデンティティが青年期にどのような現われ方をするか、その拡散と確立の様相が示されており、対角線上には発達課題が示されている。また垂直欄のタテのますには、青年期前後にアイデンティティがどのような形で芽ばえてくるか、あるいは影響するか

表1 Eriksonによる個体発達分化に関する理論的図式

段階	心理・社会的 危機・所産	人格の活力 (徳)	重要な対人 関係の範囲	社会価値、秩序 に関係した要素	心理・社会的 行動様式	儀式化の 個体発生	心理・ 性的段階
I	信頼：不信	望み	母および母性的 人間	宇宙的秩序	得る、見返りに与 える	相互的 認知	口唇期
II	自律性： 恥、疑惑	意志	両親の人間	“法と秩序”	つかまえ、はなす	善悪の 区別	肛門期
III	自主性： 罪悪感	目的感	核家族の人間	理想的原型	ものにする(まね る)、らしく振舞う (遊ぶ)	演劇的	エディプ ス期
IV	勤勉性： 劣等感	有能性	近隣、学校内の 人間	技術的要素	ものを造る(完成す る)、ものを組み合 わせ組み立てる	遂行の ルール	潜伏期
V	同一性： 同一性拡散	忠誠心	仲間グループ、 グループ対グル ープ・リーダー シップのモデル	知的、思想的な 将来の展望	自分になり切る(あ るいはなれない)、 他人が自分になり切 ることを認め合う	信念の 共同一致	青年期
VI	親密性： 孤立	愛情	友情における相 手意識、異性、競 争・協力の相手	いろいろな型の 協力と競争	他人の中に自己を 見出す、見失う		
VII	世代性： 停滞性	はぐくみ 世話	分業ともち前を 生かす家族	教育と伝統の種 々相	存在を生む、世話 をする	世代継 承的認可	性器期
VIII	統合性： 絶望	知恵	“人類”“私のよ うなもの”(自分 らしさ)	知恵	一貫した存在を通 して得られる実存、 非存在への直面		

(注) Eriksonは、人間生涯(ライフ・サイクル)を通じての同一性形成過程に関して、様々な側面から綿密な理論化を積み重ねている。本表の大半は、これまでに繰り返し紹介されてきたものであるが、個体発達分化の仮説的な理論図式であるので、出来る限り図式と概念的かつ実際の「対話」を重ねながら、その妥当性の確認と認識の深化を行っていくことが望まれる。なお、各々の領域に関するEriksonの主な出典を略記するので詳しくは原著を参照のこと。心理・社会的危機の所産、重要な対人関係の範囲、心理・社会的行動様式などに関しては、『幼児期と社会』『自我同一性』『主体性：青年と危機』のライフ・サイクルに関連した章を参照。人格の活力に関しては、『洞察と責任』の第4章を参照。儀式化の個体発生、社会価値、秩序に関係した要素については、『玩具と理性』の第2章を参照のこと。(鐘他, 1984, 自我同一性研究の展望より引用)

が表わされている。

この図表を青年理解という視点から考察して、西平は以下の指摘をした。

1. アイデンティティ形成は、誕生時から、生を終るまで、人間にとっての課題なのであるが、とりわけ青年期は意識的、自発的、主体的に取り組まれる時期である。
2. 青年心理の理解のためには、理想と現実、過去と現在、現在と未来、自己と他者、個人と社会、現実と歴史、事実と価値などを統一的にとらえなければならず、この点で両義性を特色とするアイデンティティという概念は、他のどんな語よりも柔軟であり包容力をもっているのととりわけふさわしいものである。
3. このことと関連して、アイデンティティという語には、発達的な見方とともに、歴史的で

表2 Eriksonの心理社会的発達（1956）

	1	2	3	4	5	6	7	8
I 乳 児 期	信 頼 対 信				一 極 性 対 早熟な自己 分化			
II 早期幼児期		自 律 性 対 恥, 疑 惑			両 極 性 対 自 閉			
III 遊 戯 期			自 主 性 対 罪 惡 感		遊 戯 同 一 化 対 (エディプス) 空 想 同 一 性			
IV 学 童 期				勤 勉 さ 対 劣 等 感	労 働 同 一 化 対 同 一 性 喪 失			
V 青 年 期	時 間 展 望 対 時 間 拡 散	自 己 確 信 対 同 一 性 意 識	役 割 実 験 対 否 定 的 同 一 性	達 成 の 期 待 対 労 働 麻 痺	同 一 性 対 同 一 性 拡 散	性 的 同 一 性 対 両 性 的 拡 散	指 導 性 の 分 極 化 対 権 威 の 拡 散	イデオロギ ー の 分 極 化 対 理 想 の 拡 散
VI 成 人 前 期					連 帯 対 社 会 的 孤 立	親 密 さ 対 孤 立		
VII 成 人 期							生 殖 性 停 滯	
VIII 成 熟 期								統 合 対 絶 望

〈図式の見方〉この図式の特徴は、時間的発達軸と、心理的素因軸の2次元の直交軸からなり、各発達段階の課題が、つねに「対」になっていることである。

心理的素因軸とは、たとえば、種子の胚に、芽や茎・根・花・果実となる部分があらかじめ予定されていて、成長の過程で分化していくのと同じように、人間の心の中にも、発達過程の中で分化していく素因があるという「個体発達分化説」から生まれたものである。そして、出芽期には芽が、次の段階には根と葉が、そして開花期には花が分化していくのと同様に、発達の各段階に固有の素因がある。その素因が、同一番号の発達時期と交わるところに、発達課題があるというのである。

（中西他，1985，アイデンティティの心理より引用）

あり、同時にある種の存在論的な含みまでもつものが入っている。青年理解には、精神分析的な心のダイナミックスをとらえることと同時に、実存精神分析的な、青年自身にとってその行動、その心情がどのような意味をもつものであるかをもとらえなければならず、この点でもすぐれた概念なのである。

以上の西平の指摘にも語を尽して述べているように、アイデンティティという概念が青年理解のために有用であることは、現在の青年心理学では自明のこととして広く認められている。しかも、Eriksonの著作も数多く邦訳され、加えて、遠藤（1981）、鑑他（1984）、中西他（1985）、その他アイデンティティに関する研究の成果が次々と出版されているので、本稿では

あえてこれ以上アイデンティティの概念について討議することはやめ、現在のアイデンティティ研究における方法論について展望することにする。

2. アイデンティティ研究について

アイデンティティに関する研究は、臨床的な分野の研究と発達心理学的観点からの研究に分類することができる。臨床的な研究は、青年期における「同一性対同一性拡散」の危機に焦点をあて、青年が現在体験している同一性の主観的意識的な感覚や同一性危機に対する対処行動様式から同一性をとらえる方向である。他方、発達のアプローチは、ライフサイクルにおける同一性形成を、心理社会的発達にそって明らかにしようとし、同一性を過去の体験が再統合された発達の達成結果として考え、過去の心理社会的危機の解決の成功および失敗の程度から測定する方向である（中西他）。

これらエゴ・アイデンティティ研究についての展望は 1960 年頃からの研究数の増大を踏えて、すでに鑑、山本、宮下が包括的にレビューしている。その後も研究は枚挙にいとまのない程、次から次へと行なわれてきたが、1988 年頃から、日本心理学会、日本教育心理学会をはじめとして種々の場で、特に日本における自我同一性研究の新しい展開への手掛りの探究が具体的になされるようになった。

それらの討議の中でしばしば問題され、特に重要と考えられるものには次のものがある。

1. わが国の同一性研究は、ほとんど青年期に集中しているが、Erikson の概念はライフ・サイクルの観点からみられたものであり、青年期以後の同一性の特徴とプロセスを明らかにする必要がある。
2. わが国において青年期の同一性を探索し傾倒していく場合、日本人が重要と考える価値観、職業、人間関係などを見直し、分析する必要がある。
3. 同一性形成のプロセスには男女で差がみとめられる。男子では自我同一性の確立の後で第 VI 段階の親密性が確立されるが、女子の場合は同一性と親密性が同時的か、あるいはむしろ親密性がさきに達成され、その後に同一性が確立されるという報告がある。

このような議論がでてきた原因は、単に研究成果が集積されたためとのみいうことはできない。Erikson の理論に基づく研究をすすめるためには、同一性の客観的な測定が重要な問題となる。そのためには操作的測定が必要となるが、鑑ら（1978）の指摘にもあるように、「同一性概念を明確にとらえようと心理検査・尺度構成などによって操作的に定義し研究を行っても、概念本来のもつ多義的で総合的な生きた意味内容が失われ、その限界性から発展的研究につながりにくい」という恐れがある。しかし中西らも言及する如く、「同一性が臨床的概念である以上、避けられない問題」ではあるが、「心理臨床において、臨床的事例研究と客観的調査研

究が有機的に統合されなければならないのと同じように、同一性概念の理解を深め、これを発展させるためには、操作的測定研究を欠くことはできない」と言えるのである。この点については鑑らも同一性測定についての研究の見直しおよびその成果への期待をも指摘している。

そこで比較的最近報告されている欧米での同一性測定研究を展望し、わが国における操作的研究の可能性について再検討してみることにしよう。

同一性を客観的に測定する方法には、面接法、質問紙法、心理検査法など諸々の方法があるが、本稿では後に続く研究の主要目的との関連をも考慮し、面接票を作成し実施する半構造化された面接法と質問紙による調査法について検討していくことにする。

(1) 半構造的面接による同一性地位研究

Marcia, J. E. (1966, 1976) は面接すべき領域と内容をあらかじめ定めて被験者にかなり自由に面接することにより、アイデンティティの達成度を測定する方法を考え提案した。彼はこれを identity status interview と名づけている。すなわちアイデンティティを達成した状態を status と呼んだが、日本では同一性地位と一般に訳している。Marcia は心理・社会的領域として、職業とイデオロギー (宗教と政治) を設定し、その内容として crisis と commitment を基準にして測定しようとした。crisis とは社会的役割を自分のものにする意志や試みを決定する時、危機を経験しているか否かを意味し、一般には「危機」と訳されているが、むしろ発達課題への対処様式を探し求める試みであり後に Matteson D. R. (1977) の提案した exploration「探索」という語をあてるほうが誤解を生じる可能性は少ないと思われる。commitment は人生において重要である職業とイデオロギーについてどの程度積極的なかわりをもっているかであり、従来どおり「傾倒」と訳しておく。この二つの基準をもとに同一性地位について 4 類型を見いだした。すなわち、① 同一性達成 (identity achievement)、② モラトリアム (moratorium)、③ 早期完了 (foreclosure)、④ 同一性拡散 (identity diffusion) である。

同一性達成型とは探索の時期をすでに経験し、一定の職業やイデオロギーを自らの意志で決定、選択し、それにより行動している人たちである。

モラトリアム型は同一性探索における葛藤を経験している過程にあり、自己選択の努力はみられるが、傾倒による積極的なかわりは今だ持っていない状態である。

早期完了型はいかなる探索も経験しないままに、特定の職業やイデオロギーに傾倒しており、一見同一性が形成されているかの如く見える人たちである。

同一性拡散型は、今まで自分が何者であるかについて意識的に探索した経験がないために、現在の自分について想像することが不可能な pre-crisis 型と、意識的に探索を行った結果、傾倒しないままの状態にもどってしまっただけで拡散している post-crisis 型とがある。これらを表

表 3 Marciaの自我同一性地位（無藤清子，1979）

自我同一性地位	危機	傾倒	概 略
同一性達成 (identity achievement)	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了 (foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなさ）が特徴的。
同一性拡散 (identity diffusion)	経験していない	していない	危機前 (pre-crisis) : 今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像することが不可能。
	経験した	していない	危機後 (post-crisis) : 全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない。

(中西他, 1985, アイデンティティの心理より引用)

にして示したのが、表 3 である。

マーシアは同一性地位決定のために前述したように半構造化された面接を約 15 分から 30 分行った。この面接には職業およびイデオロギーの領域について、個人の考えや意識にかかわる質問項目が用意されており、被験者の反応は二つの基準で職業、政治、宗教それぞれの同一性地位が決定され、その 3 つの同一性地位を組み合わせ、全体的同一性地位が決められる。

わが国では無藤（1979）が最初に Marcia の研究の追試をおこなった。無藤の研究はよくまとまっており、その後の研究の先駆となったが、マーシアの研究の宗教の問題は日本ではそれほど青年の同一性形成の要因とはならないことが明らかにされた。また、鑪ら（1977）も面接法により大学生の同一性形成のプロセスを研究した結果から、Marcia の 4 類型を見い出すとともに、様々のヴァリエーション、例えば回避型、プレイボーイ型、超越型なども存在することを報告している。

その後、同一性地位に重要な領域は他にもあるのではないかという問題について検討がなされ、Marcia, J. E. & Friedman, M. L. (1970) は女子大学生の同一性地位を測定するために、職業、政治、宗教に性についてのイデオロギーを加えて測定をおこなった。また Matteson は crisis という語の代りに exploration（探索）という語を用いるべきことを主張するとともに、

領域についても職業、政治、価値観、性役割を設定してデンマークの高校生を対象に同一性の測定を行い検討をした。Grotevant, H. D., Thorbecke, W. & Meyer, M. L. (1982) は Marcia が挙げた職業、宗教、政治に、友人関係、デート、性役割という3つの対人関係の領域を加えて研究を行い、付加された分野の妥当性の検討をした。

Marcia の研究から展開された第2の最近の問題は同一性地位における性差の研究である。

Erikson の同一性理論は女性より男性の発達の方をより十分に実証的に証明していることはすでによく知られている。つまり同一性達成は男子青年よりも女子の方がより長い時間を要するのである。上述の対人関係は女子の同一性に重要なものである。1977年 Josselson, R. らは心理社会的成熟を評定する半構造化面接法を用いて、男女青年における心理社会的成熟とアイデンティティの様相の差異を検討した。Hodgson, J. W. & Fischer, J. L. (1979) は男女大学生ではアイデンティティ形成の過程に相違があり、男子は職業、宗教、政治の領域でより発達していくのに対して、女子は性役割の分野をより達成していくことを見出し、「Erikson によってはあまり十分に認められなかったが女性のアイデンティティ形成においては親密性が重要な問題である」と結論した。その後、Ginsberg, S. D. & Orlofsky, J. L. (1981), Josselson, R. (1982) らは女子青年について同一性地位の研究を行なっている。

さらに Côté, J. E. & Levine, C. (1983) は Marcia の開発した同一性地位面接の方法が Erikson の提唱したエゴ・アイデンティティに関する理論を真に実証的に測定することができているのか否かに関して検討した。その結果、Côté らは Marcia の測定は Erikson のアイデンティティ形成を十分に操作的に実証しえていないと結論づけている。

Marcia の方法で測定している同一性地位の4類型は、互いにどのような関係にあるのかといった問題も論じられてはいるが、明確な結論を与えるにはいたっていない。

ごく最近では、青年期後期におけるアイデンティティ形成とその後の親密性との関連、あるいは同一性地位と対人関係との関連などについても論じられるようになってきている (Kroger, J. & Haslett, S. J. 1988, Craig-Bray, L., Adams, G. R. & Dobson, W. R. 1988)。

（２） 質問紙法による同一性の測定

アイデンティティに関する質問紙（尺度）は、これまで諸々の観点から開発され使用されてきたが、中西らは、第1に心理社会的発達段階に着目したもの、2. 同一性感の測定、3. 同一性拡散感の測定、4. 同一性地位と達成度の測定、5. SD法とQ分類法の差異得点による測定に分類している。本稿では続く実践的研究の目的を鑑み、1, 2 および 4 の測定方法について展望することにする。

1. 心理社会的発達段階に基づく質問紙法

Erikson の発達漸成図式に基づいて自我同一性を測定しようとする尺度でもっとも代表的な

表4 Eriksonの発達図式の概要とRasmussenのカテゴリー

発達段階	発達の危機	3つのサブカテゴリー
乳児期 (Infancy)	基本的信頼感 (Trust) 対 不信感 (Mistrust)	① 時間的展望 ② 他者への信頼感 ③ 好機の喪失感
幼児前期 (Early Childhood)	自律性 (Autonomy) 対 恥、疑惑 (Shame, Doubt)	① 自己確信 ② 自律感 ③ 恥に対する恐れ
幼児後期 (Play Age)	自主性 (Initiative) 対 罪悪感 (Guilt)	① 家族や自己の育ちに対する嫌悪 ② 集団での役割実験 ③ 自主性
学童期 (School Age)	勤勉性 (Industry) 対 劣等感 (Inferiority)	① 達成への努力 ② 競争への過剰意識 ③ 仕事 (課題) に対する集中力
青年期 (Adolescence)	同一性 (Identity) 対 同一性拡散 (Identity Diffusion)	① 心理・社会的健全さ ② 自己概念と他者認識の一致 ③ 計画性・目的性及び自己の進む方向の了解
成人前期 (Young Adult)	親密性 (Intimacy) 対 孤立 (Isolation)	① 親密な対人関係 ② なじまない人や信念の拒絶 ③ 対人関係における情緒的孤立

(鑑他編, 1984, 自我同一性研究の展望より引用)

ものは, Rasmussen, J. E. (1964) の考案したものである。Rasmussen は心理・社会的発達段階の I から VI までの段階すなわち乳児期から成人前期までの各段階について, それぞれの危機をどの程度解決しているかにより同一性を測定する Ego Identity Scale (EIS) を作成した。彼は表 4 に示したように, Erikson の理論に基づいて各段階に 3 つの下位カテゴリーを設定し, 各下位カテゴリーに 4 項目を与え, 合計 72 項目の質問項目を作成した。反応は「はい」, 「いいえ」の 2 件法で求め, 各段階の得点および総得点により自我同一性得点が算出される EIS は欧米においてもっとも使用頻度が高く信頼性が高いとされている (Waterman, A. S. 1982)。

わが国でも, 鑑, 山本, 宮下により邦訳した EIS が紹介され, 宮下 (1987) はさらに 2 件法から 7 段階評定法に変更して信頼性と妥当性の検討を行なっている。高橋 (1988) もまた独自に EIS を翻訳し, 自我同一性地位と EIS の関連について検討している。

これらの結果から日本語版の EIS も比較的高い信頼性と妥当性を有していることが認められている。

Rosenthal, D. A., Gurney, R. M. & Moore, S. M. (1981) は Erikson の心理社会的発達段階を検討するために, the Erikson Psychosocial Inventory Scale (EPIS) を作成した。EPIS は Erikson の最初の 6 段階について, それぞれの発達課題の達成度を測定するために 12 項目ずつ質問項目が設定されている。12 項目のうちの 6 項目は危機に対する解決の成功を,

残り6項目は解決の失敗を表わした文章であり、13才から適用可能である。反応は「ほとんどいつもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5段階評定尺度で求め、尺度得点は各下位段階ごとに算出され、プロフィールを描くことができる。彼女らは622人の青年男女を被験者として信頼性と妥当性を検討し、有効な尺度であることを実証している。

中西ら（1983）は、このEPSIの日本語版を作成している。

その他にも、Constantinople, A. (1969), Boyd, R. D. & Koskela, R. N. (1970)のものなども作成されている。

日本では加藤（1986, 1989）が Bourne, E. (1978) の概念的検討に基づいて作成した同一性次元尺度を作成、使用している。

2. 同一性感の測定

同一性の感覚とは、自己の連続性や斉一性に基づく自己確信であり、Eriksonによれば、具体的には「身体がくつろぎゆったりしている感じ」、「自分がどこへいこうとしているかわかるという感覚」である。

同一性感に関する尺度を最初に作成したのは Dignan, M. H. (1965) であった。Dignan は、自我同一性の次元として、自己感覚、ユニークさ、自己受容、対人的役割期待、安定性、目標指向性、対人関係の7つを設定し、それぞれの次元について Erikson の著述を中心に項目を50抽出し、尺度を構成した。鑑の言及によれば、この尺度は項目の随所で「同一性の感覚」の基本である「自己意識と他者の自分に対する認識の一致」の側面によく気が配られていることが特徴であると指摘されている。

この種の質問紙として他に古沢（1968）のものがある。古沢は青年期の同一性形成と両親への同一化との関連を調べるために尺度を作成した。彼は、「社会的な承認のもとに形成されてきた自己の役割への認識と個人内におけるそのような自己像の定着」と同一性を定義づけ、自己信頼感、目標の設定、対人関係の保持、情緒的安定性、自分に対する容認という5下位カテゴリーを設定し、38項目からなる尺度を構成した。反応は3件法でなされるが、この尺度はわが国の先駆的存在である。

その他に、Tan, A. L. らの尺度も同一性感を測定する尺度である。Tan の尺度は中西によって邦訳使用されている。

遠藤ら（1981）は、自我同一性を操作的にとらえることは可能であるという考えから、自我同一性尺度を作成した。

砂田（1979）は同一性を測定するには、臨床的には同一性拡散からのアプローチが重要であると考えて同一性混乱尺度を作った。砂田の尺度は上述の同一性感の尺度と裏返しの尺度内容であり、負の自我同一性感といえることができる。

3. 同一性地位、達成度の測定

Marcia の同一性地位面接では同時に、同一性達成度を測定するための文章完成テストが実施され、相互の関連が検討されていた。

半構造化された面接法の節ですでに触れた Marcia の設定した領域については種々の検討がなされてきたが、面接法という方法自体、実施ならびに採点に多くの時間を必要とし、また判定が客観的でないという問題点もあることが、Adams, G. R. ら (1979) により指摘された。また Adams, G. R. らは被験者を一つの同一性類型に割り当てようとする静的な類型化についても批判をし、新たな尺度を作成した。この尺度は、Marcia の4つの同一性ステータスの内容を表わす項目を各6項目ずつ作成し、全部で24項目から成り立っている (the Objective Measure of Ego Identity Status: OM-EIS)。

1979年に作成された尺度は職業、政治、宗教の領域に関連づけられており、判定の基準は次のようになされた。

- ① ある一つの同一性地位の得点だけがサンプル平均の1SDをこえるなら、その個人は、その同一性地位に位置づけられる。
- ② すべての得点が1SD以内であれば、モラトリアムである。
- ③ 1つ以上の得点が1SDを超える場合は移行段階にあるものとする。

Grotevant, H. D. & Adams, G. R. (1984) は、1979年のOM-EISを改訂し報告している。主な改訂点は領域に職業、宗教、政治に哲学的的人生スタイル、友情、デート、性役割、リレーションが追加され、64項目になったこと及び4点評定尺度法で反応することであった。新しい尺度について妥当性と信頼性が検討され、有効な尺度であることが報告されている。

その後、青年期の精神的健康の観点からOM-EISを用いて、青年期の親子関係 (Campbell, E., Adams, G. R. & Dobson, W. R. 1984)、青年後期における親密性形成の程度との関連 (Craig-Bray, L., Adams, G. R. & Dobson, W. R. 1988) などの実証的研究が次々と報告されている。

この他の同一性測定尺度としては、性的同一性、民族同一性などを測るいくつかの尺度も研究されている。

3. 今後の研究展望

前章までにレビューしてきた青年期の自我同一性の研究は、現代の日本において実証的に研究するために、どのような方向からどのような側面を解明すべくアプローチすべきなのだろうか。

Erikson の提唱した自我同一性理論は、わが国においても非常に有効な概念であることは自

明の理である。しかし、わが国の現代青年の実態は、他の欧米諸国のものとは大きな隔たりがあり、そのまま適用することには限界があることも事実である。

アイデンティティの概念そのものの見直しも必要であろうが、当面する問題はむしろその研究方法にあるものと考えられる。

すでに1960年代から、わが国においてもアイデンティティを客観的に測定するための試みがなされ、多くの成果もあげられてきた。しかし、多くのものは外国の研究用具を翻訳使用したものであり、独自のものはほとんど見つけれなかった。

日本の青年は、入試制度を含む学制のあり方においても、また高学歴化による学業偏重主義的な社会風潮の影響によっても、他の文化とはかなり歪んだ青年期をすごしているのが現状である。受験戦争、おちこぼれ、いじめ、家庭内暴力と次から次へと青年が主役の社会問題が発生している。かかる実状の中で青年期を通過する人たちを理解するためには、新たな用具の開発が必要であろう。

同一性地位の考え方は、現在の日本の青年を解明するために大きな示唆を与えてくれるものと思われる。しかし、Marciaの設定した3領域もAdamsらが付け加えた5領域も日本における研究では不十分なものである。

日本の青年にとって自我同一性を達成するための領域としては政治、宗教よりもむしろ学業の方が重要であると思われる。

さらに精神的健康の観点から考察すると、性役割同一性の獲得は大きな意味を有することは、すでに以前にのべた通りである（井上，1987）。1973年以来、性役割の測定は大きく進展した。新たな性役割の概念にもとづいて、自我同一性確立との関連を検討すべきことも直面した課題であるといえよう。

性役割については新しい尺度が次々と作成された。その中でも特にBem, S. L.の開発したBSRI, Spence, J. T.らのPAQ, Heilbrun, A.の形容詞チェックリスト, Berzins, J. L.のPRF ANDRDなどがその代表的なものであるが、これらの尺度にも種々の問題点があることはすでに指摘されている（Lenney, E., 1979, 井上）。主な問題点を列挙すると次のようなものがあげられる。

1. 尺度ごとに同一の性役割概念に基づいているにもかかわらず項目内容に相違がみられる。この原因として考えられるのは項目作成の際に、性役割ステレオタイプに依拠してアイテムソースを集めた尺度、理想的な性役割像に基づいたものなど、アイテムソースの収集方法に相違があることである。何を基準にして項目を決定すべきかということについては議論の余地が残されるが、現実の性役割同一性を測定することを目ざすためには、理想像よりは現実像に依拠するほうがよりよいのではないであろうか。

2. アンドロジニー（両性性）という性役割に関する新しい概念は、現在の研究においては

男子性と女子性をともに併せもつことであるとみなされている。それ故、尺度においても男子性尺度と女子性尺度を使用し、両尺度得点がともに高い場合に両性性的であると判定されている。しかし、両性性的男性の場に応じた女性的行動、意識と、両性性的女性の同じ状況での女性的行動・意識は、同じ意味内容をもつものとは断言できない。むしろ、同じような行動でもその意味づけは男・女で異なっていると考える方が事実在即しているものといえる。さすれば、測定尺度に関しても男女同じ項目であること自体がすでに問題といえる。

以上の展望から、自我同一性に関しても、性役割についても日本の文化、社会の現状に合致した新しい測定尺度の開発がもっとも早急に解決されるべき課題である。

文 献

- Adams, G. R., Shea, J. & Fitch, S. A. 1979 Toward the development of an objective assessment of ego-identity status. *Journal of Youth & Adolescence*, 8, 223-237.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem, S. L. 1981 *Bem Sex-Role Inventory—professional manual*. Consulting Psychologists Press, Inc.
- Bourne, E. 1978 The state of research on ego identity, a review and appraisal. Part 1. *Journal of Youth & Adolescence*, 7, 223-251.
- Campbell, E., Adams, G. R. & Dobson, W. R. 1984 Familial correlates of identity formation in late adolescence: A study of the predictive utility of connectedness and individuality in family relations. *Journal of Youth & Adolescence*, 13, 509-525.
- Côté, J. E. & Levine, C. 1983 Marcia and Erikson: The relationships among ego identity status, neuroticism, dogmatism, and purpose in life. *Journal of Youth & Adolescence*, 12, 43-53.
- Craig-Bray, L. & Adams, G. R. 1985 Different methodologies in the assessment of identity congruence between self-report and interview techniques? *Journal of Youth & Adolescence*, 15, 191-204.
- Craig-Bray, L., Adams, G. R. & Dobson, W. R. 1988 Identity formation and social relations during late adolescence. *Journal of Youth & Adolescence*, 17, 173-187.
- Dignan, M. H. 1965 Ego identity and maternal identification. *Journal of Personality & Social Psychology*, 1, 476-483.
- 遠藤辰雄 1981 アイデンティティの心理学, ナカニシヤ出版
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. (仁科弥生訳 1977 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle, Psychological Issues, I. Monograph 1* (小此木啓吾訳, 1973 自我同一性, 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1964 *Insight and Responsibility*. (鑪幹八郎訳, 1971 責任と洞察, 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and Crisis*. (岩瀬庸理訳 1973 アイデンティティ—青年と危機, 金沢文庫)

- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性の形成と親子関係 依田 新編 現代青年の人格形成, 第4章, 金子書房, Pp. 67-85.
- Ginsburg, S. D. & Orlofsky, J. L. 1981 Ego identity status, ego development and locus of control in college women. *Journal of Youth & Adolescence*, 10, 277-307.
- Grotevant, H. D. & Adams, G. R. 1984 Development of an objective measure to assess ego identity in adolescence: Validation and replication. *Journal of Youth & Adolescence*, 13, 419-438.
- Grotevant, H. D., Thorbeck, W. & Meyer, M. L. 1982 An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain. *Journal of Youth & Adolescence*, 11, 33-48.
- Hodgson, J. W. & Fischer, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth & Adolescence*, 8, 37-50.
- 井上知子 1987 性役割の概念と測定について 追手門学院大学 20 周年記念論集——文学部篇 17-27.
- Josselson, R. 1982 Personality structure and identity status in women as viewed through early memories. *Journal of Youth & Adolescence*, 11, 293-299.
- Josselson, R., Greenberger, E. & McConochie, D. 1977 a Phenomenological aspects of psychosocial maturity in adolescence. Part I. Boys. *Journal of Youth & Adolescence*, 6, 25-55.
- Josselson, R., Greenberger, E. & McConochie, D. 1977 b Phenomenological aspects of psychosocial maturity in adolescence. Part II. Girls. *Journal of Youth & Adolescence*, 6, 145-167.
- Kacerguis, M. S. & Adams, G. R. 1980 Erikson stage resolution: The relationship between identity and intimacy. *Journal of Youth & Adolescence*, 9, 117-126.
- 加藤 厚 1986 同一性測定におけるアプローチの比較検討, 心理学研究, 56, 357-360.
- 加藤 厚 1989 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究, 心理学研究, 60, 184-187.
- Kroger, J. & Haslett, S. J. 1988 Separation-Individuation and ego identity status in late adolescence: A two-year longitudinal study. *Journal of Youth & Adolescence*, 17, 59-79.
- Lenney, E. 1979 Androgyny: Some audacious assertions toward its coming of age. *Sex Roles*, 5, 703-719.
- Lewin, K. 1951 *Field Theory in Social Science* (猪股佐登留訳, 1956 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. 1967 Ego-identity status: Relationship to change in self-esteem, general adjustment and authoritarianism. *Journal of Personality*, 35, 118-133.
- Marcia, J. E. 1976 Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth & Adolescence*, 5, 145-150.
- Marcia, J. E. & Friedman, M. L. 1970 Ego identity status in college women. *Journal of Personality*, 38, 249-263.
- Matteson, D. R. 1977 Exploration and commitment: Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. *Journal of Youth & Adolescence*, 6, 353-374.
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究 35, 253-258.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 27, 178-187.
- 中西信男, 水野正憲, 古布裕一, 佐方哲彦 1985 アイデンティティの心理, 有斐閣.
- Newman, B. M. & Newman, P. R. 1975 *Development through life — A psychosocial approach*. (福富

- 護, 伊藤恭子訳 1980 生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性, 川島書房)
- 西平直喜 1979 青年期における発達の特徴と教育, 大田 堯他編 岩波講座 子どもの発達と教育 6 青年期, 発達段階と教育する 第1章 岩波書店, Pp. 1-56.
- 西平直喜 1983 青年心理学方法論, 有斐閣.
- 西平直喜, 久世敏雄編 1988 青年心理学ハンドブック 福村出版.
- Rasmussen, J. E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825.
- Reisch, T. M. & Hirsch, B. J. 1989 Identity commitments and coping with a difficult developmental transition. *Journal of Youth & Adolescence*, 18, 55-69.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M. & Moore, S. M. 1981 From trust to intimacy: A new inventory for examination Erikson's stage of psychosocial development. *Journal of Youth & Adolescence*, 10, 525-537
- ルソー, J. J. 1762 エミール (平林初之輔訳 1927, 世界大思想全集 10巻 春秋社)
- 佐方哲彦 1985 青年期の自我同一性形成——EPSIによる発達課題の達成過程の解明, 青少年問題研究, 34, 49-64.
- 沢田 昭 1982 現代青少年の発達加速 創元社.
- Spranger, E. 1926 *Psychologie des Jugendalters*. (土井竹治訳 1973 青年の心理, 五月書房)
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性, 教育心理学研究, 27, 64-70.
- 高橋裕行 1988 同一性と親密性の危機の解決における性差—自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討 教育心理学研究, 36, 210-219.
- Tan, A. L., Kendis, R. J., Fine, J. T. & Porae, J. 1977 A short measure of Eriksonian ego identity. *Journal of Personality Assessment*, 41, 279-284.
- 鑓 幹八郎, 名島潤慈, 山本 力 1978 自我同一性に関する研究の現況——日本における研究の展望, 広島大学教育学部紀要, 第I部, 27, 137-148.
- 鑓 幹八郎, 山本 力, 宮下一博編 1984 自我同一性研究の展望 シンポジウム青年期3 ナカニシヤ出版
- 津留 宏編 1970 青年心理学 有斐閣
- Waterman, A. S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, 18, 341-358.